アンの幸福

モンゴメリ
村岡花子訳

新潮文庫

Title : ANNE OF WINDY WILLOWS
Author : Lucy Maud Montgomery
Copyright © 1936 by Harrap Publishing Group
Japanese language paperback rights arranged
with Harrap Publishing Group Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

アンの幸福
—第五赤毛のアン—

新潮文庫　モ－4－5

Published 1958 in Japan
by Shinchosha Company

昭和三十三年二月二十八日　発行
平成二年五月二十五日　七十刷改版
平成三年五月十五日　七十八刷

訳者　村岡花子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)三二六六—五一一一
編集部(〇三)三二六六—五四四〇
振替　東京四—八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Midori Muraoka 1958　Printed in Japan

ISBN4-10-211305-3 C0197

新潮文庫

アンの幸福

—第五赤毛のアン—

モンゴメリ
村岡花子訳

新潮社版

1156

アンの幸福

—第五赤毛のアン—

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

全世界に在る

アンの腹心の友人たちへ

最初の一年

1

（サマーサイド中学校校長、文学士アン・シャーリーより、
キングスポート、レドモンド大学医科学生ギルバート・ブライスへの手紙）

九月十二日　月曜日
プリンス・エドワード島
サマーサイド、幽霊小路（ゆうれいこうじ）、柳風荘（ウインディ・ウィローズ）にて

最愛のギルバート

すてきな所書きでしょう！　こんな愉快（ゆかい）な名を聞いたことがおありになって？　柳風荘というのがあたしの大好きなこのあたらしい家の名前です。幽霊小路という名も気にいりました。法的存在ではありません。ほんとうはトレント街というのですが、週刊新聞の『ウィークリー・クーリア』にたまにのるときのほかはけっしてトレント街なんていう名で呼ばれる

ことはありません――そんなときにはみんなけげんな顔をして、「へえ、トレント街だって？　いったいそれはどこにあるのだろう？」と言います。たしかにここは幽霊小路なのです。もっともどうしてそうなのかあたしにはわかりませんけれど。すでにレベッカ・デューにも訊いたのですが、レベッカも、それはもとから幽霊小路であり、何年か前に幽霊が出たという昔話があったということのほかは知らないのです。しかし、この小路でレベッカは自分よりひどい姿をしているものをかつて一度も見かけたことはないと言い張って、幽霊説には重きをおいていません。

だけど、話の先走りをしてはいけませんわね。あなたはまだ、レベッカ・デューをご存じなかったのね。でも、知合いになりますよ――ええ、きっとなるにきまってます！　この先、あたしの手紙の中で、レベッカ・デューが大きく姿をあらわす予感がします。

今はたそがれどきです、最愛のギルバートよ（そういえば、「たそがれ」っていい言葉じゃないこと？　あたしは夕暮れよりも好きだわ。ビロードのような感じで、陰影をたたえて、そして――そして――たそがれらしいんですもの）。昼間はあたしはこの世の人間であり、夜は眠りと永遠のものです。でも、たそがれどきにはそのどちらからも解放されて、あたしはただ、自分とそれからあなたのものになるのです。ですから、この時間をあなたへの手紙を書くために捧げようと思いますの。もっとも、これはラブレターにはなりませんわ。あたしのペンは引っかかるのです。引っかかるペンや、すりへったペンではラブレターなんか書けないわ。だから、あたしがちゃんとしたペンを手に入れたときしか、そのような手紙はあ

たしから貰えないものと覚悟してちょうだい。そのあいだに、あたしのあたらしい家の住人のことをお話しいたしましょう。ギルバート、みんなたまらなくいい人たちなのよ。

あたしは昨日、下宿をさがしに出てきました。レイチェル・リンド夫人もいっしょにきました。表向きは買物をしにということでしたが、ほんとうはあたしに下宿を選んでくれるためなのです。あたしが文科出身であり文学士という肩書があるにかかわらず、リンドのおばさんはあたしをまだ、手をひいたり、指図したり、監督したりしてやらなくてはならない世間知らずの子供だと思っていなさるのです。

あたしたちは汽車できたのですけれど、ああ、ギルバート、ひどく滑稽な冒険にぶつかったのよ！　あなたもご存じのとおり、あたしという人間は求めもしないのに冒険にぶつかるタイプなのね。まるで、あたしのほうで冒険を引き寄せでもするような気がするわ。それはちょうど汽車が駅にとまろうとしている瞬間に起こったのです。あたしは立ち上がり、リンドのおばさんのスーツケースを持とうと身を屈め――おばさんはサマーサイドの友達のところで日曜日をすごす予定でした――座席のぴかぴか光る腕木に（そうあたしは思ったのです）ぐっと両手の拳でもたれかかりました。たちまち、おそろしい勢いで両方の手を叩きのめされてあたしはあやうく悲鳴をあげそうになりました。ギルバート、座席の腕木だと思ったのは男の人の禿げあたまだったのです。その人はこわい顔であたしを睨みつけています。そして、明らかにたった今、目を覚ましたばかりのようでした。あたしはしおしおと謝り、大急ぎで汽車からおりました。最後に振り返ったときもまだその男の人は睨んでおりました。

リンドのおばさんは震えあがってしまうし、あたしの指はまだ痛いのよ！

あたしは下宿をさがすのにたいして苦労はあるまいと思っていました。なぜなら、トム・プリングル夫人とかいう人がここの中学校の代々の校長を十五年にわたり下宿させてきたからです。けれど、なんの理由からかわかりませんが、急にプリングル夫人は「わずらわしい思い」をするのがいやになったからと言って、あたしを引き受けてくれません。こちらで好ましいと思うほかの何軒かの家でも体よく断わられました。そのほかの何軒かはこちらで好ましくありませんでした。あたしたちは午後じゅう、町をさまよい歩き、暑くて、疲れて、不機嫌になり、頭痛がしてきました――少なくとも、あたしはそうでした。あたしは絶望してしまい、諦めかけました――ところがこのとき、幽霊小路が出現したのです。

あたしたちはリンドのおばさんの昔からの親友であるブラドック夫人の家に寄りました。すると、ブラドック夫人は「後家さんたち」があたしを引き受けるかもしれないと言いました。

「あの人たちがレベッカ・デューの給料を支払うために、下宿人を一人おきたがっていると聞きましたよ。余分のお金を少しかせがないことには、これ以上レベッカをおいとく余裕があの人たちにはないのです。で、もし、レベッカが行ってしまうとなったら、だれがあの年とった赤い牝牛の乳をしぼるんです？」

ブラドック夫人はまるであたしがその牝牛の乳しぼりをすべきだと思っているかのように、きっとあたしを見据えました。でも、それができますよと、あたしが誓ってみせたところで

夫人は信じなかったでしょうよ。

「どの未亡人のことを言ってなさるのかね？」と、リンドのおばさんがたずねました。

「なに、ケイトおばさんとチャティおばさんですよ」

と、だれもかれも――物知らずの文学士でさえも――そんなことは知っているはずだという、ブラドック夫人の口ぶりでした。「ケイトおばさんというのはアマサ・マコンバー夫人のことで――この人は船長の未亡人ですよ――それから、チャティおばさんのほうはリンカーン・マクリーン夫人で、ただの未亡人さね。けれど、みんなこの二人のことを『おばさん』と呼んでるんですよ。幽霊小路のはずれに住んでますがね」

幽霊小路！　それでことはきまりました。あたしはどうしても未亡人たちのところに下宿しなければならないことを感じました。

「すぐに行ってその方たちに会ってみましょうよ」

と、あたしはリンドのおばさんにせがみました。一刻でもぐずぐずしていたら幽霊小路が元のお伽の国へと消え失せはしないかと思われたからでした。

「あの人たちには会えますがね、けれど、あなたを実際に引き受けるかどうかをきめるのはレベッカなんですよ。レベッカ・デューがウィンディ・ウィローズ――柳風荘――を牛耳っているんですからね」

ウィンディ・ウィローズですって！　そんなことが現実にはありえない――そうだわ、ありえないことだわ！　あたしは夢を見ているにちがいない。だけど、リンドのおばさんは現

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にそれは屋敷につけるにはおかしな名前だと言ってなさるじゃありませんか。

「ああ、マコンバー船長がそうつけたんですよ。ほら、あれはあの人の家だったでしょう。船長は家のまわりにありったけの柳を植えこんで、えらく自慢にしてましたよ。もっとも、自分じゃ家にいることはめったになかったし、長く逗留することなんか一度もありませんでしたがね。ケイトおばさんはその点が不満だと、いつも言い言いしたものでしたよ。けれども、わたしたちにゃ、船長がそんなにわずかしか家にいられないのが不満だと言っているのか、それとも帰ってくること自体が面倒だと言うのか、どうもわかりませんでしたがね。そうですね。シャーリーさん、あなたがあそこにいられればいいがと思いますよ。レベッカ・デューは料理が上手で、コールド・ポテトにかけちゃ天才ですからね。もし、レベッカの気にいれば、あなたは何不自由なく暮らすことになりますよ。気にいらなかったら――そう、それっきりですね。町にあたらしい銀行家がきて下宿をさがしているという話を聞いてますから、レベッカはその人のほうがいいと言うかもしれないし。それにしても、トム・プリングルさんがあなたを引き受けなかったとは、おかしいですね。サマーサイドにはプリングル家やその分家がいっぱいあるんですよ。あの人たちは『王族』と呼ばれてましてね、あなたはあの人と仲のいい側にまわっていなきゃいけませんよ、シャーリーさん、そうでないと、サマーサイド中学でやっていかれませんからね。この界隈はもとからあの人たちが牛耳ってるんです。エイブラハム・プリングル船長の名にちなんだ通りもあるくらいでしてね。まったく一族せいぞろいしてますよ。ですが、楓屋敷のあの老婦人二人が一族の采配を振ってい

るんです。あの人たちはあなたのことを怒っているそうですよ」
「どうしてですの？」と、あたしは叫びました。「その方たちにとって、あたしはまったく見も知らぬ者ではありませんか」
「なにね、あの人たちのまたまた従兄弟にあたる人が校長志願をしたんで、みんなはその人がなるものと思っていたのです。あなたが採用になったときには一族の者たちはみな頭をそらしてわめきましたよ。なに、人というものはそんなものです。あるがままの姿で受け取るよりほかはありませんよ。あの人たちはあなたにクリームのように口当りのいいことを言うでしょうが、たえずあなたに不利なようにと、ものごとを持ってくでしょうよ。なにもあなたの気を挫きたいわけではないんですがね、でも、前もって注意されれば前もって用心することになりますからね。あなたが立派にやりとげてあの人たちの鼻をあかしてやりなさればいいと思いますよ。もし、未亡人たちがあなたを引き受けたとしたら、あなたはレベッカ・デューといっしょに食事をしてもかまわないでしょうね？　レベッカは召使じゃありませんからね。あの人は船長の遠い親類なのです。お客があるときにはレベッカは食卓にはつきません――そういうときには自分の身分をちゃんと心得ているんです――けれど、あなたがあそこに下宿するとなれば、もちろん、レベッカはあなたをお客とは考えないでしょうからね」
あたしは気づかっているブラドック夫人に、レベッカ・デューと食事をするのは結構だと断言してから、リンドのおばさんを引きずるようにして立ち去りました。なんとしても銀行

家の先を越さなくてはなりませんから。

ブラドック夫人は戸口までついてきました。

「それから、チャティおばさんの感情を害してはいけませんよ。他愛もなく害しちまうんですからね。かわいそうに、あの人は感じやすいんです。ほら、あの人はケイトおばさんほどのお金は持っていませんからね――もっとも、ケイトおばさんにしてもたいして持っているわけじゃあありませんけれど。それに、ケイトおばさんのほうは旦那さんを心から好いていましたからね――自分の旦那さんをですよ――けれど、チャティおばさんのほうはそうじゃなかったのです――自分の旦那さんが好きじゃなかったということですよ。無理もありませんよ！　リンカーン・マクリーンは変わり者の年寄りでしたからね。けれど、チャティおばさんとすれば、世間の人たちは自分をよくは思っていないとひがんでますからね。きょうが土曜日でよかった。もしも金曜日だったら、チャティおばさんはあなたに宿を貸すなどとは考えもしなかったでしょうよ。あなたはケイトおばさんのほうがかつぎやだと思いなさるでしょう？　船乗りというものはそんなものですからね。ところが、チャティおばさんのほうなんですよ――あの人のつれあいは大工だったんですけれどね。あの人も若いころにゃたいそうきれいでしたがね、かわいそうに」

あたしはチャティおばさんの感情を大事にするからとブラドック夫人に保証したけれど、夫人は散歩道のところまでついてきました。

「ケイトとチャティはあなたがいないまにあなたの持物を掻き回しなどしませんよ。たいへ

ん良心的な人たちですからね。レベッカ・デューはやりかねないけれど、でも、あなたの告げ口などしませんよ。それから、わたしがあなたなら、玄関へは行きませんね。あの人たちが玄関を使うのはなにかほんとうに大事なときだけなのです。アマサのお葬式の時以来、一度も開いたことがないと思いますよ。横手の戸口へ行ってごらんなさい。鍵は窓敷居にのせてある植木鉢の下に入れてありますからね。もし、だれも家にいなかったら、戸の鍵を開けて待っていらっしゃい。それから、どんなことがあっても、猫をほめちゃいけませんよ、レベッカ・デューが嫌ってるんですからね」

あたしは猫をほめないと約束し、ようやく出かけることになりました。ほどなく、あたしたちは幽霊小路にきました。それはごく短い横丁で、ひろびろとした田舎道につづいており、はるかかなたの青い丘が美しい背景を作っていました。片側には家は一軒もなく、土地はゆるい坂となって港へ下っております。もう一方の側にはたった三軒しか建っておりません。最初の家はただの家です。それ以上なにも言うことはありません。その次の家は石の飾りのついた赤煉瓦づくりの、いかめしい邸宅で、二重勾配屋根には屋根窓が疣のようにいっぱいついており、平らな頂きには鉄柵がめぐらしてあって、家の周囲にあまりたくさんえぞ松や縦が生いしげっているのでほとんど家は見えないくらいです。家の中はおそろしく暗いにちがいありません。それから三番目の、そして最後のが柳風荘で、ちょうど曲り角にあり、正面は芝を植えこんだ道路になっており、もう一方は木陰も美しいほんとうの田舎道となっています。

あたしはたちまち夢中になってしまいました。ほら、一目見たときに、自分でもどうしてだかわからないけれど感激をうける家というものがありますわね。柳風荘はそんな家なのです。説明しますと、それは白い木造家屋です――真っ白で――緑色の日除けがついています――あおあおとした緑色です――隅に「塔」があり、両側に屋根窓がついております。低い石垣で往来からへだてられ、石垣に沿ってところどころに柳が植わっており、裏手の大きな庭には、花と野菜がたのしげにごっちゃになっています。でも、これだけではその魅力をお伝えできません。一口に言えば、これは好ましい個性を持った家であり、どこかグリン・ゲイブルスの香が漂っているのです。

「これこそ、あたしのための場所だわ。前世よりの約束だったのよ」

と、あたしは有頂天になりました。

リンドのおばさんは前世の約束を頭から信用している顔ではありませんでした。

「学校までながいこと歩かなくちゃならないね」

と、おばさんは感心しない口調でした。

「そんなことかまわないわ。いい運動になりますよ。あら、道の向こうのあの美しい樺と楓の木立をごらんなさいな！」

リンドのおばさんは目を向けました。けれど、

「蚊で悩まされなければいいがね」

と、言っただけでした。

あたしもそう思いました。蚊は大嫌いですもの。良心の呵責よりも一ぴきの蚊のほうが眠りの邪魔になるくらいです。

あたしは玄関からはいらずにすんでよかったと思いました。いかにも寄りつきにくい外観でした――大きな、二重扉になった、木目の出ている戸で、赤い花模様のガラスの鏡板が張ってありました。それはちっともこの家のものらしく見えませんでした。ところどころ草に埋もれたうすい平たい砂岩を敷いた、かわいらしい小径を辿って行き着いた小さな緑色の横手の戸口のほうがずっと親しみやすく、よい感じでした。小径のへりはたいそうきちんとした、整然たる花壇となっており、リボン草やブリーディング・ハートや、鬼ゆりや、アメリカなでしこや、よもぎ、花よめ草や、紅白のひな菊、それにリンドのおばさんのいわゆる「芍薬」が植わっていました。もちろん、この季節に全部咲き揃ってはおりませんでしたが、そのときどきに花を咲かせ、しかも立派に咲かせたことが見てとれました。離れた一隅にはばらの一画があり、柳風荘と陰気な隣家とのあいだは、蔦が一面にからんだ煉瓦塀となっていて、まんなかにある色あせた緑色の扉の上はアーチ形の四目垣となっております。蔓がそれにかけわたすようにからんでいるところを見ると、この扉はここしばらく開いたことがないのは明らかでした。扉といってもほんとうは半分しかありません。なぜなら上の半分はただ卵形にくりぬいてあるだけなので、そこから向こう側の藪のような庭がちらっと見えるくらいでしたから。

ちょうどあたしたちが柳風荘の庭の門をはいったとき、あたしは小径のすぐそばのクロー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com